

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

James R. Carey and Shripad Tuljapurkar (eds.)  
*Life Span: Evolutionary, Ecological, and  
 Demographic Perspectives.*

A Supplement to Volume 29, 2003, *Population and Development Review*  
 New York: Population Council, 2003, ix + 293pp.

ポピュレーション・カウンシル (Population Council) は最近大体 1 年に 1 回 *Population and Development Review* の臨時増刊号として人口問題の各重要領域における秀れた論文集を発行しているが、ライフスパン (人類最長寿命) と題する寿命に関するトピックを取り上げたのは今回が初めてである。ライフスパンという概念は人間の生存可能な最長期間を表す。これは人間が何歳まで生きられるか、人間の寿命はどこまで伸びるのかの問題に当然関連して、われわれ人口関連学者の興味を大いに惹く課題である。この 20 年間に生物人口学 *biodemography* という新しい、本格的な専門領域が出現し、次々と新機軸の研究成果を発表している。これは生物体としての人間の寿命伸張に関する生物学と死亡の年齢パターン分析を考究する人口学との統合化によるものである。

編者の James R. Carey と Shiripad Tuljapurkar はそれぞれカリフォルニア大学デービス校昆虫学教授、スタンフォード大学の人口科学および生物科学教授である。本特集は 14 の章から成り立ち、執筆者の数は 24 名に及ぶ。その中には Ronald Lee, J. -M. Robine, James Vaupel, Kenneth Wachter 等の著名な学者の名前があり、また日本人として国際的な業績を挙げている堀内四郎、齋藤安彦両氏の名前も見受けられるが、それ以外は生物学者で人口学者ではなく、これまで日本の人口学者の間ではほとんど知られていない専門家の名前が多い。

本書はまず Carey の寿命に関する生物人口学の業績の展望と総括から始まる。この領域は、これまで人間の、そして生物の寿命が生殖活動に規定されるという古典的進化論の立場を超克して新しい知見を獲得しつつあるという。特に、人類の寿命伸張に貢献する社会的発展の役割を論じている。続く本論の 13 の章は四つのグループに分かたれる。第 1 のグループは人間の老齢化のメカニズムに関する新しい理論の説明を行い、そこにおける環境変化の影響を論ずる。老年後期になると、死亡率の増加がむしろスローダウンする傾向が見られる。寿命伸長における異質性の問題は今後追及されるべき課題である。第 2 は、生物学的基礎を問題にするというよりも、人口統計学的あるいは経済学的観点からの接近である。それらは老齢化の要因とそれに対する適応に関しての新しい知見を提供する。第 3 は人間の老年後期における 100 歳を超えるような非常に長寿な人びとの年齢パターンを分析したものである。非常に高齢な段階では、本来の遺伝的な要因よりも環境の影響が大きくなるケースが多い。そして最後に第 4 として Ken Wachter が以上の各章の論点の統合化を行っている。

これまで、人間はすぐれて生物的存在であり、生物体の生殖と生存はトレードオフの関係にあって、生物は生殖が終われば、鮭のように直ちに死ぬのが本来の姿であると考えられてきた。したがって、生殖期間が一定である限り、人間の寿命には限界があり、今後はこれまでのように平均寿命が直線的に増加することはありえないとするのが古典的生物進化論の立場であった。しかし現在の生物人口学の最前線においては、究極的に寿命の限界はあるとしても、85 歳とかの低いレベルではなく、もっと上の年齢であるとの主張が有力である。最近の日本人女性の平均寿命の伸びはいぜん着実であり、また 100 歳以上の人口数は最近飛躍的に増加している。人間の寿命の限界はまだ伸びると考えるのがより妥当であろう。

本書によって、これまで日本では比較的手薄であった生物人口学の新知識を大いに満喫することができる。この領域の最近の著作として、Kenneth Wachter and Caleb Finch, *Between Zeus and Salmon*, 1997 と James Carey, *Longevity: The Biology and Demography of Life Span*, 2003 をあわせて読まれることをお勧めする。

(河野稠果)